

小学校「外国語」「外国語活動」における 絵本読み聞かせ技術の向上をめざして

*Improving the Picturebook Storytelling Skill in “Foreign Language (English)” and
“Foreign Language Activities” in Elementary School*

早川 知江 HAYAKAWA Chie
(芸術教養領域)

0. はじめに

本稿は、小学校英語教育で英語絵本を効果的に活用しようとする研究の一環である。2011年度から全国全ての公立小学校で実施されてきた「外国語活動」が、2020年度からは3、4年生の「外国語活動」、5、6年生の「外国語」へと拡充され、「外国語」が小学校で初めて教科となるなど、小学校での英語教育はますますその重要性を増している。同時に、英語教育における絵本も、その存在感を増している。

そもそも文科省が、外国語指導者に必要な資質や能力の1つとして、「感情を込めて絵本の読み聞かせができる」ことを挙げている（東京学芸大学 2017）ように、絵本の読み聞かせは、小学校で英語教育を担当するのに必須の技術とされている。そして、英語絵本利用の有用性を指摘する研究や、その活用法の提案もさかんに行われている（絵本利用に関する学術的研究については、小林・西垣（2007）、樋口（2005）、樋口・他（2017）、吉村・他（2017）などを、実践的な絵本活用ガイドについては、外山・宮下（2010）、外山・他（2010）、リーパー（2011）などを参照のこと）。

本稿は、こうした流れの中で、小学校教諭を目指す大学生の英語絵本読み聞かせ技術の向上を目指すものである。特に、筆者が名古屋芸術大学で担当している「外国語（英語）」「外国語科指導法」「外国語活動」は、小学校教諭を目指す人間発達学部生が履修する科目だが、学生の将来の英語教育力向上のため、それらの科目内で実践できる、英語絵本読み聞かせの効果的な訓練法を模索した。

絵本の読み聞かせは、単に本文が淀みなく、正しい発音で読めればいいというものではない。他にも、適切な間の取り方、声音の使い分け、子どもの興味を引きつける適切な声かけや補足コメント、子どもからの発話を促す問いかけなど、さまざまな技術を複合的に用いる。このことについては、さまざまな幼児教育の手引書などでも指摘されているが、より学術的・実験的なアプローチとして本稿がもっとも参考にしたのは、萬谷（2009）である。

萬谷の研究は、英語絵本読み聞かせ時の教師の発話を分析し、どのような発話が教育に効果的かを明らかにしたものである。本稿はこの研究を、小学校教諭を目指す学生の教育

に適用することを試みる。そのため、まず第1節で萬谷の研究を概観し、どの部分を本稿で継承し、どの部分を発展させ、新たに何を明らかにするのかを示す。第2節は調査部で、筆者が担当する「外国語科指導法」で、受講生に読み聞かせ訓練を行った結果を報告する。その際、以下の3パターンの読み聞かせを紹介する：①何の予備知識もなく行った場合 ②萬谷の研究に基づく「模範的」な読み聞かせ鑑賞後に行なった場合 ③児童への声かけとして使える英語表現を学んだ後に行なった場合。続く第3節が分析部で、上記3パターンの読み聞かせを比較分析し、どのような訓練を行った場合に学生の読み聞かせ技術が最も向上するかを考える。

これらの調査の結果、以下の3点が明らかになる：①「模範的」な読み聞かせを1度鑑賞しただけで、学生の読み聞かせは劇的に向上し、日本語でなら、児童の発話を促す効果的な声かけができるようになる ②英語で声かけするには、やりとりに使える教室英語表現を前もって練習しておく必要がある ③しかし既存の教室英語表現集では、発話目的に合った表現が咄嗟に出てこない場合があり、発話カテゴリーによって分類した表現リストや、児童との「やりとり」を念頭に置いた教材の開発が必要である。

1. 先行研究：萬谷（2009）の研究

本節では、本稿の研究の出発点となった、萬谷（2009）の絵本読み聞かせにおける発話カテゴリーの研究を概観する。

1.1. 発話カテゴリー

萬谷は、小学校の授業における絵本読み聞かせで教師が行った発話を、発話カテゴリーに分け、その種類や頻度を分析した。発話カテゴリーとは、Arnold et al. (1994) や Boom-Hoffman et al. (2006)、Yorozuya (1998) で提案・使用された、発話を文法構造によってではなく機能（＝発話で何を行っているか）によって分類するカテゴリーであり、以下のような種類（一部）がある：

- ・ Yes-No Q：Yes か No かを問いかける
- ・ Wh Q：中身（誰が・いつ・どこで・なぜ・どのように）を問いかける
- ・ Acceptance：児童の発話を受け入れる
- ・ Negation：児童の発話を否定したり、誤りを指摘する
- ・ Doubt：児童の発話の真偽を疑う
- ・ Recast：児童の発話を正しい英語で言い換える
- ・ Answer Confirmation：児童の発話を繰り返して、正しいことを確認する

1.2. 調査方法

萬谷は、読み聞かせ時の指導者のやりとりの力量によって、児童の英語習得の度合いが

異なるのではないかという前提のもと、次のような調査を行った。データ収集のため、小学校3、4年生を担当する3人の日本人教師に、児童を対象として、*Where's Spot* (Eric Hill, 1980) という英語絵本の読み聞かせをしてもらった。そのやりとり（教師、児童両者の発話を含む）をビデオ収録し、スクリプト（言語音声を文字文書に書き起こしたもの）化した。そして、教師と児童が用いた発話カテゴリーの種類や頻度を分析した。特に、教師の用いた発話カテゴリーの種類と、その直後の児童の発話頻度の相関を見ることで、教師のどのような発話が最も効果的に児童の（できれば英語の）発話を促すかを分析した。

1.3. 結果

前節に述べた調査の結果、最も児童の発話を引き出した（つまりそのカテゴリーを教師が用いた直後に児童の発話が増えた）カテゴリーは、児童の発言を褒めたり認めたりする Acceptance だった。褒められ、認められると発言意欲が高まるというのは直感的にも予想できることであるが、それが実際のデータで明らかに示されたのは興味深い。

2番目に児童の発話を引き出したのは、内容を問いかける Wh Q、4番目が Yes か No かを問いかける Yes-No Q であった。これらの直接的な疑問文は、返答を求めていることが明らかのため、児童の発話を促すのは当然と思われるが、さらに興味深いのは、日本語による Wh Q や Yes-No Q よりも、英語によるもののほうが、児童からより多くの英語による発話を引き出したという結果である。萬谷自身はこの現象を、「教師ができるだけ英語で話す努力が子供の英語発話の増加に貢献する（2009: 77）」とまとめている。

また、上記以外の発話カテゴリーも、うまく使えば児童の発話を引き出す効果があることが明らかになった。例えば児童の発話の真偽を疑う Doubt などは、一見すると児童に心理的圧迫を与えて悪影響であるように感じられるが、実際には、児童が正しい答えをした時に、教師が意図的に「本当かな？」などと「とばける」ことによって、児童の発言意欲を刺激する場面が見られたという。また、児童の発言が（英文法的に）間違っていた場合、誤りを指摘せずにさりげなく正しい表現に言い換える Recast を使用することで、児童に間違いを恐れる気持ちを抱かせないようにし、絵本を楽しむ雰囲気を壊すことなく正しい文法を教えられる。この意味で Recast も、直接的に児童の発話を促すわけではないが、発話意欲を減退させないカテゴリーとして重要だろう。

上記を簡潔にまとめると、萬谷の研究結果は次の3点にまとめられるだろう：

- ・児童の発話をもっとも促す教師の発話カテゴリーは、Acceptance や、Wh / Yes-No Q などの問いかけ
- ・それ以外の発話カテゴリーも、児童の発話を促すため効果的に使う
- ・日本語による問いかけよりも英語による問いかけの方が、児童の英語による発話を引き出し、教育上効果的

2. 調査

今回の調査では、筆者が名古屋芸大の人間発達学部で小学校教諭を目指す学生向けに開講している「外国語科指導法」の授業において、以下の3つの状態の読み聞かせを、受講生の許可を得て記録した：

- ① まだ何も教授や訓練を行っていない状態の読み聞かせ
- ② 手本となる読み聞かせ動画を視聴した後の読み聞かせ
- ③ 英語による声かけのため、既存の教室英語表現集を学び、練習した後の読み聞かせ
その後、各読み聞かせ音声をスクリプト化し、本文朗読以外の発話を、萬谷（2009）の研究に基づき発話カテゴリーに分類した。

①～③の手順について補足すると、①について、「まだ何も教授や訓練を行っていない」とはいえ、事前に絵本の英語本文を声に出して読む練習は行なった。調査に使用した絵本は、55ヶ国語以上に翻訳されて出版されている世界的ベストセラー絵本、Eric Carl の *The Very Hungry Caterpillar* (邦題『はらぺこあおむし』) である。調査では、①に先立ち、作者の Eric Carl 自身による朗読音声を数回聞き、英語発音の見本とした。この音声は、英語本文のみを朗読したものである。その後、受講生に英語本文を1文ずつ和訳してもらい、内容理解を深めた。そして、教師（早川）の発音に合わせて、ゆっくり1文ずつ発音練習し、英語本文がほぼ正確に発音できるようにした。

②は、2.1節に詳しく見るような「手本となる読み聞かせ」をネット上の動画で視聴するものである。この手本の読み聞かせは、本文朗読のみでなく、日本語・英語両方による即興の声かけが多く含まれ、児童とのやり取りを促す内容となっている。受講生には、この動画視聴の後、以下のようなルールを課した：1見開きに1度は本文以外のコメントを入れること。コメントの目的は、児童が絵本の内容をよりよく理解し、興味を持って読み聞かせに参加してくれるようにすることである。

③は、2.4節に詳しく見るような教室英語表現集を受講生に学習してもらってから、再度 *The Very Hungry Caterpillar* の読み聞かせに取り組んでもらった。その際、以下のようなルールを課した：②の時と同様、1見開きに1度は本文以外のコメントを入れること。そのコメントは日本語でも良いが、なるべくたくさん英語も使うこと。その目的は、児童が英語を聞く機会を増やすことと、英語で話しかけることにより児童が英語で受け答えしたくなる雰囲気をつくることである。

以上をまとめると、調査のより細かな手順は以下のようになる：

- ① まだ何も教授や訓練を行っていない状態の読み聞かせ

それに先立ち以下の準備を行う：

- ・朗読見本音声（英語本文朗読のみ）のリスニング
- ・英語本文講読（＝内容理解）
- ・英語本文発音練習

② 手本となる読み聞かせ動画を視聴した後の読み聞かせ

その際のルール：

- ・ 1見開きに1度は本文以外のコメントをはさむ（日本語か英語かは指示しない）
- ・ コメントすることで 1）児童の内容理解を助ける 2）児童に読み聞かせに興味をもたせる

③ 既存の教室英語表現集を学び、練習した後の読み聞かせ

その際のルール：

- ・ 1見開きに1度は本文以外のコメントをはさむ。なるべく英語も使用する
- ・ 英語を用いることで 1）児童が英語を聞く機会を増やす 2）児童が英語で返答したくなる雰囲気をつくる

2.1. 手本の読み聞かせ

第1節にまとめた萬谷の研究によれば、「良い読み聞かせ」とは、児童の（できれば英語による）発話を引き出す読み聞かせであり、その特徴としては、

- ・ 本文朗読以外に、読み手による声かけやコメント、児童とのやりとりがある
- ・ 発話カテゴリーとして、Acceptance や、Wh / Yes-No Q といった問いかけを多く含む
- ・ それ以外の発話カテゴリーを、児童の発話を促すように効果的に使っている
- ・ 日本語による問いかけだけでなく、英語による問いかけを多く織り交ぜている

といったものだろう。

本稿では、児童教育目的で制作された絵本朗読DVDや、インターネット上で無料公開されている読み聞かせ動画の中から、上記のポイントを押さえている「手本」として、コスモピア株式会社が運営するウェブサイト「英語の絵本クラブ」(<https://www.e-honclub.com>) から、外山節子氏の *The Very Hungry Caterpillar* (邦題『はらぺこあおむし』) の読み聞かせ動画 (<https://www.e-honclub.com/video/otehon/>) を使用する。

外山氏は、英語絵本を初級英語教育の場に取り入れる研究と実践を続けている研究者で、外山・宮下(2010)、外山・他(2010)など、小学校外国語教育で用いることのできる絵本ガイドや、その実践的な活用法を紹介した書籍を多く執筆・出版している。

氏の読み聞かせがどのように「手本」としての性質を備えているか確認するため、以下に表1として、読み聞かせ音声を発話カテゴリーに分析した。この分析で用いる発話カテゴリーは、萬谷(2009)も用いた下記の11種類である：

- ・ Yes-No Q：Yes か No かを問いかける
- ・ Wh Q：中身（誰が・いつ・どこで・なぜ・どのように）を問いかける
- ・ Repeat Prompt：重要表現のリピートを求める
- ・ Completion Prompt：文の途中まで言い、児童に続きを言わせる

- ・ Acceptance : 児童の発話を受け入れる
- ・ Negation : 児童の発話を否定したり、誤りを指摘する
- ・ Doubt : 児童の発話の真偽を疑う
- ・ Recast : 児童の発話を正しい英語で言い換える
- ・ Answer Confirmation : 児童の発話を繰り返して、正しいことを確認する
- ・ Answer Provision : 児童の発話が誤っていたり答えが出なかった時に、正解を提示する
- ・ Alternative Clues : 答えの選択肢を示して、児童の発話を促す

また本稿では、上記のカテゴリーでは分類しきれない発話を扱うため、以下の3カテゴリーを新たに付け加える：

- ・ Statement : 児童の発話を特に求めない、情報の提示
- ・ Challenge : 児童の能力を試すことで動作や返答を促す 例) 「～できる?」「～が分かる?」
- ・ Confirmation : 児童が既に知っているはずの内容を繰り返して確認する

表1：外山氏による *The Very Hungry Caterpillar* の読み聞かせ (一部抜粋)

太字：英語本文朗読以外の発話
 (括弧部)：音声によらない動作
 本文朗読には発話番号・発話カテゴリーを付さない

発話番号	読み聞かせ音声	発話カテゴリー J：日本語、E：英語
1.	こんにちは、外山節子です。	J: Statement
2.	今日は、 The Very Hungry Caterpillar の読み聞かせをご紹介します。	J: Statement
3.	(机上のリンゴの置物を取る) This is an apple.	E: Statement
4.	あ、There's a hole.	E: Statement
5.	何が出てくるのかな？	J: Wh Q
6.	(リンゴの穴を通して、あおむしのヌイグルミを出す) Ah! A very tiny, and very hungry caterpillar.	E: Answer Provision
7.	じゃ、待っててね。(リンゴを机上に戻す) (絵本の表紙を見せる) The Very Hungry Caterpillar. The Very Hungry Caterpillar.	J: Statement
8.	『はらぺこあおむし』の元の本は、 英語 なんですよ。	J: Statement
9.	(英語のタイトルをゆっくり指差しながら) はらぺこ、あおむし。	J: Statement
10.	うーん、あおむしのことは caterpillar っていうんだね。(指であおむしの動きを示す)	J: Statement
11.	はらぺこは hungry. (手のひらでおなかをさする)	J: Statement
12.	じゃあ、読んでみましょう。 The Very Hungry Caterpillar, He started to look for some food.	J: Statement
13.	英語で曜日は言えますか？	J: Challenge
14.	さっきは Sunday でした。	J: Alternative Clues
15.	次の日は？	J: Wh Q
16.	... Monday. On Monday, he ate through one apple.	E: Answer Confirmation
17.	おなかいっぱいになったかしら。	J: Yes-No Q

18.	……ダメ。 But he was still hungry. (おなかをさする) [中略]	J: Answer Confirmation
19.	じゃあ、hungryっていっぱい出てくるから、一緒に動作をしながら 言ってみてくれる？	J: Repeat Prompt
20.	(おなかをさすりながら) Hungry.	E: Repeat Prompt
21.	Good. [中略]	E: Acceptance
22.	(指を折って数えながら) Sunday, Monday, Tuesday...	E: Completion Prompt
23.	そう、よく覚えてました。	J: Acceptance
24.	Friday.	E: Answer Confirmation
25.	On Friday he ate through one, two, three, four, five oranges, but he was still hungry. [中略] *本文は実際には「he ate through five oranges」だが、意図的に 「one, two, three, four, five oranges」と読むことで児童に自分でも数 えたくさせている。	E: Completion Prompt
26.	そう、はらべこあおむしの絵本、覚えてるよね。	J: Confirmation
27.	土曜日にいっぱい食べたんだよね。	J: Confirmation
28.	食べたもの、覚えてる？	J: Challenge
29.	じゃあ今日は、ぜんぶ英語で言えるかな？ [本文略]	J: Challenge
30.	こんなにたくさん食べると、どうしたのかな？	J: Wh Q
31.	そう、おなかが痛くなったのです。 That night he had a stomachache!	J: Answer Confirmation
32.	痛そうに言える？	J: Challenge
33.	(おなかを押さえて) Stomachache.	E: Repeat Prompt
34.	(おなかをさすって) Hungry.	E: Repeat Prompt
35.	(お腹を押さえて) Stomachache.	E: Repeat Prompt
36.	困った困った。[中略] He built a small house, called a cocoon ...	J: Statement
37.	面白い英語だね。	J: Statement
38.	言ってみる？ ... a cocoon around himself. He stayed inside for more than two weeks.	J: Challenge
39.	(指を2本立てる) 2週間もいたんだって。	J: Statement
40.	2週間数えてみる？	J: Challenge
41.	Sunday, Monday, Tuesday, Wednesday, Thursday, Friday, Saturday.	E: Repeat Prompt
42.	これで一週間だよ。	J: Confirmation
43.	もうあと一週間。[後略]	J: Completion Prompt

表1に見るように、手本の読み聞かせは児童の発話を引き出すようさまざまな技法を効果的に用いていることがわかる：

- ・本文朗読の合間に、多くのコメントや問いかけを発し（太字部）、児童とのやりとりの機会を設けている
- ・日本語、英語にかかわらず、Yes-No QやWh Qを使用し、児童の発話を促している（発話5, 15, 17, 30）
- ・直接的に返答を求めるYes-No QやWh Qだけでなく、児童の能力に挑むChallenge（発話13, 28, 29, 32, 38, 40）や、わざと途中で言い止めることで続きを児童に発話させるCompletion Prompt（発話22, 43）、繰り返して真似ることを求めるRepeat Prompt（発話19, 20, 33-35, 41）など、多様なカテゴリーをバランスよく使い、児童

が「思わず発話してしまう」雰囲気を生み出している

- ・上記 Yes-No Q、Wh Q、Challenge、Completion Promptなどで児童の発話を引き出した後は、すかさず Answer Confirmation で児童の正答を繰り返したり（発話16, 18, 24, 31）、Acceptance で褒めことばを与えたりして（発話21, 23）、児童の発話を承認している

また、直接的に発話を引き出すわけではないが、児童が絵本の内容をきちんと理解できるようにする工夫も見られる：

- ・内容を確認する Confirmation を用いることで、これまで学んだことをおさらいしたり（発話26, 27）、英文の解釈を補助するような読み手の感想を Statement で与えたり（発話36, 37）することで、英語が分からない児童が内容を理解する手助けをしている
- ・難しい質問には敢えて児童の返答を待たずに Answer Provision で正答を与えたり（発話6）、すぐに返答が得られない時は Alternative Clues を与えて答えやすくしたり（発話14）して、児童の発話を求めつつも過度な心理的負担を与えず、安心して答えられる環境をつくっている

2.2. 学生の読み聞かせ①：訓練前

前節に見たような効果的な読み聞かせを、小学校教諭を目指す学生が行えるようにするには、どのような教材を用い、どのような指導を行う必要があるのだろうか。そのことを確かめるため、2020年度前期「外国語科指導法」の受講生2名（以下；学生A、学生B）に協力を仰ぎ、第2節冒頭に見たように、

- ① まだ何も教授や訓練を行っていない状態
- ② 手本となる読み聞かせ動画を視聴した後
- ③ 既存の教室英語表現集を学び、練習した後

それぞれで読み聞かせを行ってもらい、どの時点でどのように読み聞かせが向上するかを確認した。

本節では、①の状態の読み聞かせ結果を分析する。まず以下の3つの訓練を行い、受講生が英語本文を正しく理解し、正しく発音できる状態にした：

- ・朗読見本音声（英語本文朗読のみ）のリスニング
- ・英語本文講読（＝内容理解）
- ・英語本文発音練習

ただしこの時点では、読み聞かせのコツや、本文朗読以外の声かけの重要性などについては何も教授しなかった。

受講生には、片方が教師役となって読み聞かせをしてもらい、もう片方と担当教師の早

川が児童役となって読み聞かせを聞いた。その後、教師役と児童役を交代した。教師役の学生には、「本当に児童に読み聞かせをするつもりで行う」ことのみを注意した。2名の学生に順に教師役をしてもらったが、その結果、2名とも英語本文を朗読するのみで、日本語でも英語でも、本文以外のコメントや問いかけは一切なかった。また必然的に、児童役の子による返答などもなかった。そのため、本節では発話カテゴリーの分析は行わない。

この結果が示唆するのは、次のことだろう。本文朗読以外の児童への声かけの重要性を教えたり、手本となる読み聞かせの鑑賞などを一切行わなければ、読み聞かせ初心者の学生は、「児童の発話を引き出す読み聞かせ」がそもそもどのようなものか分からず、またそれを実践するための技術も身につけていない場合が多い。

2.3. 学生の読み聞かせ②：手本動画鑑賞後

次に、2.1に見た「手本となる読み聞かせ」動画を視聴した上で、

- ・ 1 見開きに1度は本文以外のコメントをはさむ（日本語は英語かは指示しない）
- ・ コメントすることで 1) 児童の内容理解を助ける 2) 児童に読み聞かせに興味をもたせる

という2つのルールを課した。この手順を踏んだ後の学生の読み聞かせは、表2、3のようになった。

表2：手本の読み聞かせを視聴後の学生Aの *The Very Hungry Caterpillar* の読み聞かせ（一部抜粋）

太字：英語本文朗読以外の教師役学生の発話
 (括弧部)：音声によらない動作
 S：児童役学生による発話
 本文の朗読には発話番号・発話カテゴリーを付さない
 児童役学生による発話には発話カテゴリーを付さない

発話番号	読み聞かせ音声	発話カテゴリー J：日本語、E：英語
	(絵本の表紙を見せる) <i>The Very Hungry Caterpillar</i> .	
1.	Very hungry だから、すごいおなかがすいてるんだって。	J: Statement
2.	どんな話なんだろうね。	J: Wh Q
3.	S：ねー、どんな話なんだろう。	
	In the light of the moon a little egg lay on a leaf.	
4.	あー、 little egg ...ってことは……小さいタマゴがあるんだって。	J: Statement
5.	どこか見つけられるかな？	J: Challenge
6.	S：葉っぱの上。	
7.	あ、見つけた？	J: Acceptance
8.	S：うん。	
9.	小さいね。	J: Acceptance
10.	S：ちっちゃい。	

	One Sunday morning the warm sun came up and—pop!—out of the egg came a tiny and very hungry caterpillar.	
11.	あ、タマゴから、ちっちゃーいイモム……アオムシが生まれたね。	J: Statement
12.	Very hungry caterpillar. このイモムシが、すごくおなかがすいてるんだって。 He started to look for some food.	J: Statement
13.	このアオムシは……He look for some food だから……すごくおなかがすいてるから、ゴハンを探し始めたんだって。	J: Statement
14.	S: うーん。 On Monday, he ate through one apple.	
15.	リンゴを1個、食べました。	J: Statement
	But he was still hungry.	
16.	でも、まだお腹は空いてるみたい。	J: Statement
	On Tuesday he ate through two pears,	
17.	今度は洋ナシを2個、食べたんだけど、	J: Statement
	but he was still hungry.	
18.	でもまだ、お腹が……お腹は空いてるみたい。	J: Statement
	On Wednesday he ate through three plums,	
19.	今度はブラムを3つ食べたけど、	J: Statement
	but he was still hungry.	
20.	でもまだ、まだお腹は空いてるみたい。	J: Statement
	On Tuesday [Thursday の 言 い 間 違 い] he ate through four strawberries,	
21.	今度はイチゴを4個。	J: Statement
	but he was still hungry.	
22.	でもまだまだお腹が空いてるみたい。	J: Statement
	On Friday he ate through five oranges,	
23.	今度はオレンジを5個。	J: Statement
	but he was still hungry.	
24.	それでもまだお腹が空いてるみたい。	J: Statement
	On Saturday he ate through one piece of chocolate cake, one ice-cream cone, one pickle, one slice of Swiss cheese, one slice of salami, one lollipop, one piece of cherry pie, one sausage, one cupcake, and one slice of watermelon.	
25.	今度は、チョコレートケーキと、アイスクリームと、ピクルス。サラミと……ん？ 違うな。チーズと、サラミと、lollipop……アイスクリーム……キャンディーと、チェリーパイと、ソーセージと、カップケーキと、スイカ。で、こんだけ食べても……食べて、 That night he had a stomachache!	J: Statement
26.	たくさん食べたら、その日の夜、おなかが痛くなってしまいました。	J: Statement

表2に見るように、手本となる読み聞かせを鑑賞したことにより、教師役学生Aの読み聞かせが大きく変化したことがわかる。具体的には以下の通り：

- ・本文朗読の合間に、多くのコメントや問いかけを發し（太字部）、児童とのやりとりの機会を設けている
- ・特に発話4-10にかけては、教師役学生（以下「教師」）のChallengeに対して児童役学生（以下「児童」）が返答し、そこからさらに教師と児童の会話のキャッチボールが続いており、自然な発話を引き出すことに成功している。この際、教師が適切にAcceptanceを用いて児童の返答を肯定していることも、児童が発話しやすくなった

要因だろう

- ・ただし、教師が児童の返答を必要とする Question を用いたのは1箇所のみ（発話2）、Challenge を用いたのも1箇所のみ（発話5）で、あとは児童の返答を必要としない Statement のみ（実際には本文の日本語解説）になっている。そのため児童の返答も発話11以降はほとんどみられない
- ・教師の発話は全て日本語で、英語によるコメントや質問は1つも無い。そのためか、児童の返答もすべて日本語で（発話3, 6, 8, 10）、児童の英語の発話を引き出すことには成功していない

表3：手本の読み聞かせを視聴後の学生Bの *The Very Hungry Caterpillar* の読み聞かせ（一部抜粋）

太字：英語本文朗読以外の教師役学生の発話
 (括弧部)：音声によらない動作
 S：児童役学生による発話
 本文の朗読には発話番号・発話カテゴリーを付さない
 児童役学生による発話には発話カテゴリーを付さない

発話番号	読み聞かせ音声	発話カテゴリー J：日本語、E：英語
	(絵本の表紙を見せる) <i>The Very Hungry Caterpillar</i> .	
1.	このアオムシはお腹が空いてるんだって。	J: Statement
2.	なんか食べるんかなあ。	J: Wh Q
3.	S：食べるんかなあ。	
	In the light of the moon a little egg lay on a leaf.	
4.	んー、ちっちゃいタマゴ、どこにあるか分かる？	J: Challenge
5.	S：んー、そこー、そこー、葉っぱの上。	
6.	でもね、そんなことよりね、お月様に顔がついとるのが気になるんよ。	J: Statement
7.	S：(笑う) お月様、笑ってるよ。	
	One Sunday morning the warm sun came up and—pop!—out of the egg came a tiny and very hungry caterpillar.	
8.	タマゴから出てきて……アオムシが出てきたね。	J: Statement
9.	なんかこれも、なんか太陽に顔がある気がするんやけど。	J: Statement
10.	S：ある気がするね。めっちゃ横に伸びてるね、顔がね……。お月様も……間違えた、太陽もめっちゃ笑ってるし。	
11.	喜んだんかな。	J: Yes-No Q
12.	S：喜んだんかなー。	
	He started to look for some food. On Monday, he ate through one apple. But he was still hungry.	
13.	Monday は、……何だった？	J: Wh Q
14.	S：月曜日。	
15.	ねー、	J: Acceptance
16.	最初はリンゴを食べました。	J: Statement
	On Tuesday he ate through one, two ... two pears, but he was still hungry.	
17.	今度は、何を食べたかな？	J: Wh Q
18.	S：んー、ナシ。Pear.	
19.	お。	J: Acceptance
20.	いくつ食べた？	J: Wh Q

21.	S: ーん、Two.	
22.	Two.	E: Answer Confirmation
23.	そんだけ食べても、まだお腹空いてるんだって。	J: Statement
24.	S: うーん。	
	On Wednesday he ate through one, two, three ... three plums, but he was still hungry.	
25.	今度は、何を、いくつ食べたかな？	J: Wh Q
26.	S: Three plums.	
27.	Yes, OK.	E: Acceptance
	On Thursday he ate through one, two, three four ... four strawberries, but he was still hungry.	
29.	じゃあ今度は何を、いくつ食べたかなあ？	J: Wh Q
30.	S: Four strawberries.	
31.	そう。	J: Acceptance
32.	こんだけ食べてもまだお腹空いてるんだって。	J: Statement
33.	S: どんだけお腹空いてんのね。	
	On Friday he ate through five oranges, but he was still hungry.	
34.	じゃ今度は、何をいくつ食べたかなあ？	J: Wh Q
35.	S: これはね……Five oranges.	
36.	そう、	J: Acceptance
37.	5つのオレンジ、食べたんだけど、	J: Answer Confirmation
38.	それでもまだお腹が空いてるんだって。	J: Statement
39.	S: おなかペコペコ。	
40.	食いしん坊やね。食いしん坊だ。じゃあ今度は……	J: Answer Confirmation
	On Saturday he ate through one piece of chocolate cake, one ice-cream cone, one pickle, one slice of Swiss cheese, one slice of salami, one lollipop, one piece of cherry pie, one sausage, one cupcake, and one slice of watermelon.	
41.	いろいろ食べたけど、それでもお腹が空いてるのかなあ？	J: Yes-No Q
42.	S: うーん、どうだろう。でもなんか違うよ。なんか、なんか変な顔してるもん。	
43.	そうだね。	J: Acceptance
44.	そしたらね……	J: Statement
	That night he had a stomachache!	
45.	なんかおなか痛くなったみたいだよ。	J: Statement
46.	S: stomachache がお腹痛って意味なの？	
47.	そう。	J: Acceptance
46.	S: ーん、可哀想。もう死ぬんかな。	
47.	食べ過ぎたのがいかなかったのかな。	J: Answer Confirmation?

表3に見るように、手本となる読み聞かせを鑑賞したことにより、教師役学生Bの読み聞かせも大きく変化したことがわかる。具体的には以下の通り：

- ・本文朗読の合間に、多くのコメントや問いかけを発話し（太字部）、児童とのやりとりの機会を設けている
- ・学生Bは、Aに比べ用いる発話カテゴリーの種類が多く（Statement, Wh Q, Yes-No Q, Acceptance, Answer Confirmation, Challenge）、多様な手段を用いて児童の発話を引き出そうとしており、手本の読み聞かせのバリエーション豊富なコメントから多くを参考にすることが伺える

- ・特に発話2-7にかけては、教師の Wh Question や Challenge に対し児童が返答することで、自然なやりとりが成り立っている
- ・絵本内でアオムシがものを食べるたびに、教師が何をいくつ食べたか問い、それに児童が答えるやりとりが繰り返され（例：発話17-24）、全体に児童の発話回数が多くなっている。この際教師が、児童の返答を承認する Acceptance（例：発話19）や、児童の発言を繰り返して承認を示す Answer Confirmation（例：発話22）を効果的に用い、児童が安心して発話できる環境をつくっている
- ・学生Bは、この時点で既に英語によるコメントを発している（発話22, 27）。ただし発話22は児童の Two という返答をそのまま繰り返した Answer Confirmation であるため、実際の英語のコメントは発話27の Yes, OK. という Acceptance のみである
- ・児童が英語で発話する機会も、表2よりは多い（発話18, 21, 26, 30, 35）。ただしこれらの発話は全て、教師の日本語による Question に答えるため、本文に登場した英語表現をそのまま反復したものである。たとえ本文の反復であっても、英語を口にすることは、その表現の定着に効果的と考えられるため、教師側の発話が日本語であっても英語であっても、児童に返答を求めその結果英語の返答を引き出すことは教育上効果的といえるだろう

2.4. 学生の読み聞かせ③：英語表現学習後

前節に見たように、手本の動画を1度視聴しただけで、教師役学生の日本語による声かけは大きく向上する。しかしまだ、英語によるコメントや問いかけは充分発することができない（学生Bが1度英語で Acceptance を発話したのみ）。これは、学生の中にまだ読み聞かせで用いる英語表現のストックがないことを示しているだろう。単に手本を1度視聴するだけではそれらの表現は身につかないため、読み聞かせによく用いる英語表現集をある程度特別に学習する必要があることを示している。本節では、現在入手可能な教室英語表現集を学習することで、受講生の読み聞かせにどんな変化が生じるかを見てみたい。

小学校での英語教育が盛んになるにつれ、大学の小学校教諭養成課程での使用を想定した教室英語表現集が教材として多く出版されている。また、一部の行政機関や県教育委員会では、行政区域内の小学校教諭に活用を促すため、独自に教室英語表現集を作成し、インターネット上で公開している場合もある。以下にその一部を挙げる（すべて2020年9月5日 最終閲覧）：

- ・長崎県教育委員会の「教育英語表現集」サイト：

<https://www.pref.nagasaki.jp/shared/uploads/2013/07/1374196308.pdf>

- ・山口県義務教育課の「小学校外国語活動だより」サイト内「教室英語表現集」：

<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cmsdata/b/a/6/ba67831e3c03861d8ff7f0f486aca245.pdf>

・愛知県総合教育センターの「教室英語集」サイト：

https://apec.aichi-c.ed.jp/kenkyu/chousa/kiyo/98syuu/kyouka_eigo/part3all.pdf

本調査では、このうち、絵本読み聞かせに用いることができる表現が比較的多く載っている、山口県義務教育課の教室英語表現集を利用し、その中の重要表現を、① 発音練習 ② 意味・文法構造の確認 ③ 使用される場面の確認の3つの活動を通して学習した。かつ受講生には各自20分程度、学んだ表現を復習しながら暗記する時間を設けた。その後、再び同じ *The Very Hungry Caterpillar* の読み聞かせに挑戦してもらったのが表4、5である。今回は、受講生に以下のルールを課した：

- ・ 1 見開きに1度は本文以外のコメントをはさむ。なるべく英語も使用する
- ・ 英語を用いることで 1) 児童が英語を聞く機会を増やす 2) 児童が英語で返答しなくなるようにする

表4：教室英語表現集を学習後の学生Aの *The Very Hungry Caterpillar* の読み聞かせ（一部抜粋）

太字：英語本文朗読以外の教師役学生の発話

(括弧部)：音声によらない動作

S：児童役学生による発話

本文の朗読には発話番号・発話カテゴリーを付さない

児童役学生・早川による発話には発話カテゴリーを付さない

発話番号	読み聞かせ音声	発話カテゴリー J：日本語、E：英語
	(絵本の表紙を見せる) <i>The Very Hungry Caterpillar</i> .	
1.	はい、 very hungry 。すごくお腹が空いてるみたい。	J: Statement
2.	何食べるのかな。	J: Wh Q
3.	S：食べるのかなー。	
	In the light of the moon a little egg lay on a leaf.	
4.	はい、 moon ... moon ってどこにあるかな？	J: Wh Q
5.	S：Moon...moon、これ、(指差しながら)そこ。そこ。木の葉っぱの後ろ。	
6.	じゃあ、 egg 。Eggは？	J: Wh Q
7.	S：Eggはね、んーんと、ここ。葉っぱの上。	
8.	Oh, good .	E: Acceptance
9.	S：わーい。	
	One Sunday morning the warm sun came up and—pop!—out of the egg came a tiny and very hungry caterpillar.	
11.	One Sunday これって、いつの日かな？	J: Wh Q
12.	S：んー、日曜日。	
13.	日曜日のいつ？	J: Wh Q
14.	S：Morning. 朝、朝。	
15.	朝だね 。	J: Answer Confirmation
16.	じゃあ一緒に「日曜日の朝」って、 One Sunday morning って言ってみようか。	J: Repeat Prompt
17.	S：……あ、いいかな？ One Sunday morning . He started to look for some food.	
18.	このアオムシは今度、ゴハンを探し始めたんだって 。	J: Statement
	On Monday, he ate through one apple. But he was still hungry.	

19.	じゃMondayは？	J: Wh Q
20.	S: んー、月曜日。	
21.	Oh ...	E: Acceptance (未完)
	On Tuesday he ate through two pears, but he was still hungry.	
22.	早川：いいですか？ コメントなし？ 行っちゃうぞ。よろしいですか？ 1ページに何かは言ってくださいね、はい。	
	On Wednesday he ate through three plums, but he was still hungry.	
23.	Look this.... Plum ... plumってどれかな？	J: Wh Q
24.	S: Plum、これ。これこれ（指差しながら）	
25.	How many plum [plumsの間違い]？	E: Wh Q
26.	S: んー、one, two, three. Three plums.	
27.	Oh, exactly.	E: Acceptance
28.	S: わーい。	
29.	早川：いい感じですね。	
	On Thursday he ate through four strawberries, but he was still hungry.	
30.	Hungryは？	J: Wh Q
31.	S: Hungry? はらぺこ。	
32.	はらぺこ。	J: Answer Confirmation
33.	まだ……何、今度は何を食べた？	J: Wh Q
34.	S: Strawberries. イチゴ。	
35.	でもまだお腹がぺこぺこなんだって。	J: Statement
36.	S: ねー。もう、はらぺこや。	
	On Friday he ate through five oranges, but he was still hungry.	
37.	How many orange [orangesの間違い]？	J: Wh Q
38.	S: んー、one, two, three, four, five. Five oranges.	
39.	Five oranges.	E: Answer Confirmation
40.	Good. Nice.	E: Acceptance
41.	S: わーい。	
	On Saturday he ate through one piece of chocolate cake, one ice-cream cone, one pickle, one slice of Swiss cheese, one slice of salami, one lollipop, one piece of cherry pie, one sausage, one cupcake, and one slice of watermelon.	
42.	この中で、みんなだったらどれ食べたいかな。	J: Wh Q
43.	S: えー、全部。えーとね、これこれこれ、チェリーパイ。チェリーパイ。と、アイス。と、チョコレートケーキ。と、カップケーキ。	
44.	いっぱいある……。	J: Answer Confirmation
45.	いっぱい食べたらね、お腹いっぱいになれるかな。	J: Yes-No Q
46.	S: かなー。でもどうだろう。でもなんかこの人、なんか痛いって言う顔してるよ。	
47.	ねえ。	J: Acceptance
48.	アオムシはどうなんだろう。	J: Wh Q
	That night he had a stomachache!	
49.	どうかな、まだお腹減ってるかな？	J: Yes-No Q
50.	S: えー、わかんない。Stomachacheって何？	
51.	Stomachacheってお腹が痛いって意味なんだよ。	J: Statement
52.	S: お腹痛い！ やっぱ欲張ったね。欲張り過ぎたね。	
53.	食べ過ぎたね。	J: Answer Confirmation

表4に見るように、教室で使用可能な英語表現を学習したことにより、教師役学生Aの英語使用が増え、さらには児童役学生の英語使用も増えたことがわかる。具体的には以下

の通り：

- ・教師が英語によるコメントや質問をする場面が増えた（発話8, 21, 25, 27, 37, 39, 40）
- ・英語で質問されると、児童も英語で返答する（発話26, 38）
- ・教師が日本語を使用しても、Repeat Prompt を用いることにより、児童に英語表現を発音させることができる（発話16-17）
- ・手本の読み聞かせを鑑賞した直後（表2）よりも、使用する発話カテゴリーの種類が増えた（Statement, Challenge, Acceptance, Wh Qのみだった表2に対し、今回はさらにYes-No Q, Answer Confirmation, Repeat Promptも使用）。これは、学習した教室英語表現がそもそも複数の発話カテゴリーに属するため、それらを使用してみようとすることで自然と使用する発話カテゴリーが増えたのか、あるいは表3に見た学生Bの読み聞かせに児童役として参加した時に学習したためか、原因は特定できない
- ・教師による英語の発話は、確かに前回（表2）より増えたが、まだ日本語による発話の方が圧倒的に多い（日本語による発話が24回に対し、英語による発話が6回）
- ・英語による発話は、言いかけて表現が思いつかず、途中でやめてしまったと思われる箇所がある。例えば発話21はOh...の後になんらかのAcceptanceを続けたかっと思われるが、それが思い浮かばず、そのまま本文の朗読に移っている。また発話23はLook thisで始まっており、実際にはLook at this plum. やLook at this fruit. のような、児童の注意を引くため英語による指示をしようとしたと考えられるが、それを言い切ることができず、「plumってどれかな？」という日本語のWh Questionに変わってしまった

表5：教室英語表現集を学習後の学生Bの *The Very Hungry Caterpillar* の読み聞かせ（一部抜粋）

太字：英語本文朗読以外の教師役学生の発話
 (括弧部)：音声によらない動作

S：児童役学生による発話

本文の朗読には発話番号・発話カテゴリーを付さない
 児童役学生・早川による発話には発話カテゴリーを付さない

発話番号	読み聞かせ音声	発話カテゴリー J：日本語、E：英語
	(絵本の表紙を見せる) <i>The Very Hungry Caterpillar</i> .	
1.	うーん、お腹が空いた、はらべこアオムシなんだって。	J: Statement
2.	なんか食べるんかなあ。	J: Wh Q
3.	S：食べるんかなあ。これでも日本語で読んだことあるよ。 In the light of the moon a little egg lay on a leaf.	
4.	タマゴってどこにあるか、分かるかなあ。	J: Challenge
5.	S：タマゴ。タマゴ、ここ、葉っぱの上。	
6.	Oh, good job. Good job.	E: Acceptance
7.	S：Good job. いえーい。	
8.	いいねいいね。	J: Acceptance
	One Sunday morning the warm sun came up and—pop!—out of the egg came a tiny and very hungry caterpillar.	

9.	さあ、まずここで曜日が出てきたけど、何だろう。	J: Wh Q
10.	S: 曜日。えー、Sunday。	
11.	Oh ... いいね、Good job. Good job.	E/J: Acceptance
12.	Sunday どういう意味だったっけ？	J: Wh Q
13.	S: Sunday は、えーと、日曜日。	
14.	おー、正解、正解。「正解」は……	J: Acceptance
15.	早川: そうそう、[表現集] 見直してみてください。	
16.	... Nice.	E: Acceptance
17.	S: Nice. いえーい。	
18.	早川: That's right. でもいいし、Good. でもいいし、何でもいいですね。 He started to look for some food.	
19.	さあゴハンを探しに出かけたみたいだよ。	J: Statement
20.	S: 出かけた。お腹ぺこぺこや。てかなんか、[アオムシの絵が] めっちゃ痩せてるし。 On Monday, he ate through one apple. But he was still hungry.	
21.	んー、今度はじゃあ、何曜日が出てきたかな？	J: Wh Q
22.	S: Monday.	
23.	Mondayって何曜日やったっけ？	J: Wh Q
24.	S: Monday は、えー、月曜日。	
25.	Oh, good job.	E: Acceptance
26.	S: Good job.	
27.	これ、ちなみに、何を、何個食べたかな？	J: Wh Q
28.	S: リンゴ。1個。	
29.	それでもまだお腹が空いとるみたいだね。	J: Statement
30.	S: ねー、ハラペコや。よー食べるんや。	
31.	次は何か食べるんかな。	J: Wh Q
32.	S: 食べるんかな。ここにナシが見えとるけどね。	
33.	食べるんかな。実は違うかもしれんぞな。 On Tuesday he ate through two pears, but he was still hungry.	J: Doubt
34.	さあ、今度は何曜日かな。	J: Wh Q
35.	S: Tuesday. Tuesday. 火曜日。	
36.	火曜日。	J: Answer Confirmation
37.	正解、正解。	J: Acceptance
38.	じゃあ、何をいくつ食べたかな？	J: Wh Q
39.	S: えっと、two pears. ナシ。えーっと、2個。2個。	
40.	Good job.	E: Acceptance
41.	S: Good job. On Wednesday he ate through three plums, but he was still hungry.	
42.	じゃあ、今度は何曜日かな？	J: Wh Q
43.	S: 今度は、水曜日。	
44.	水曜日は、英語で何やったっけ？	J: Wh Q
45.	S: えーっと、Wednesday. Wednesday.	
46.	Good job.	E: Acceptance
47.	じゃあ、今度は何食べたかな？	J: Wh Q
48.	S: 今度は plum だって。	
49.	S: Plum ... plum こんなふうじゃないよ。	
50.	こんなふうじゃない。	J: Answer Confirmation
51.	俺も……俺もわからんな。	J: Statement
52.	早川: わかんないね。これちょっとね……こういうときに写真とかね。これあの……「日本のプラム」「外国のプラム」とか写真があったらいいかもしんないけど、それはちょっと余談です。はい。	

53.	まあGood, good. On Thursday he ate through four strawberries, but he was still hungry.	E: Acceptance?
54.	さあじゃ、今度は何曜日かな？	J: Wh Q
55.	S: 今度は、Thursday. 木曜日。	
56.	Oh, Thursday.	E: Answer Confirmation
57.	正解。Good.	E/J: Acceptance
58.	じゃあ何を……今度は何をいくつ食べたかな。	J: Wh Q
59.	S: 今度は、えっと、four strawberries. イチゴ、イチゴを4つ。	
60.	Oh, good job.	E: Acceptance
61.	でもそれでもまだお腹が空いとるみたいやね。	J: Statement
62.	S: ねー、全然満足せんね。 On Friday he ate through five oranges, but he was still hungry.	
63.	じゃあ、今度はFriday。Fridayは何曜日やったっけ？	J: Wh Q
64.	S: Fridayは、月・火・水・木……金曜日。	
65.	Oh, good job.	E: Acceptance
66.	じゃあ、今度は何を食べたかな。	J: Wh Q
67.	S: 今度Oranges. オレンジ。Five, five. 5個。5個。	
68.	Oh, good job.	E: Acceptance
69.	……じゃあ、どう、まだお腹空いとるんかな？	J: Yes-No Q
70.	S: まだお腹空いてるんかな？ 空いてると思いまーす。	
71.	Oh, いいね。	J: Acceptance
72.	Good job, good job.	E: Acceptance
73.	S: (次のページの絵を見て) めっちゃ食べ物出てきたやん。	
74.	多いけど、	J: Answer Confirmation
75.	これ、どうだろうね。 On Saturday he ate through one piece of chocolate cake, one ice-cream cone, one pickle, one slice of Swiss cheese, one slice of salami, one lollipop, one piece of cherry pie, one sausage, one cupcake, and one slice of watermelon.	J: Doubt
76.	えー、なんやったかな。んと、これ考えた。Which one do you like?	E: Wh Q
77.	S: えーっとね、ice cream cone!	
78.	Oh ...	E: Acceptance (未完)
79.	S: ... and chocolate cake.	
80.	Oh ...	E: Acceptance (未完)
81.	S: ... and cherry pie and watermelon. ... And cupcake.	
82.	いいね、いいね、いいね。	J: Acceptance
83.	Good job. Good job.	E: Acceptance
84.	さあ、じゃあ今度、こんだけアオムシ食べたけど、どうかな、まだお腹空いてるんかな？	J: Yes-No Q
85.	S: えー、わかんないけど、なんかここにいるけど。ここにいるけど、どうかな、お腹空いてんのかなあ。なんか変な顔してるけど。	
86.	そうだね。	J: Acceptance
	That night he had a stomachache!	
87.	……なんだって。	J: Statement
88.	S: ふーん。Stomachacheって何？	
89.	Stomachacheは、お腹が痛いみたいだよ。	J: Statement
90.	S: お腹が痛い！ お腹が痛い！ 食べ過ぎ！	
91.	そう。	J: Acceptance
92.	こんだけ食べたら、お腹が痛くなるみたいだね。	J: Statement
93.	S: 残念。ちょっと食べ過ぎたね。	

表5に見るように、教室で使用可能な英語表現を学習したことにより、教師役学生Bの英語使用と児童役学生の英語使用も増えたことがわかる。具体的には以下の通り：

- ・教師が英語によるコメントや質問をする場面が増えた（発話6, 11, 16, 25, 40, 46, 53, 56, 57, 60, 65, 68, 72, 76, 78, 80, 83）
- ・英語で質問されると、児童も英語で返答する（発話77, 79, 81）
- ・英語による質問でなくても、教師が英語で Acceptance（特に Good job. / Nice. などの褒めことば）を発すると、児童がそれを繰り返して発話することがある（発話7, 17, 26, 41）。このことは、教師の英語使用が増えれば自然に児童の英語使用も増えるという説を補強すると考えられる
- ・教師による英語の発話は前回（表3）より確かに増えたが、まだ日本語による発話の方が圧倒的に多い（日本語による発話が41回に対し、英語による発話が17回）
- ・英語による発話は、1度の Answer Confirmation と（発話56）1度の Wh Q（発話76）以外は全て Acceptance であり、英語で言うことのできる発話カテゴリーに偏りがある
- ・Acceptance という発話カテゴリーを具現する英語表現も、Good job. に偏る傾向がある（13回中10回。他は Nice. と Good.）
- ・英語による発話は、学生Aと同様、言いかけて表現が思いつかず、途中でやめてしまったと思われる箇所がある。例えば発話78, 80は Oh ...の後になんらかの Acceptance を続けたかったと思われるが、それが思い浮かばず、日本語による Acceptance（発話82「いいね、いいね、いいね」）になってしまった。また発話13-16にかけて、児童の「Sunday は日曜日」という返答に対し、教師が「正解。「正解」は……」と言い淀んで、配布済みの英語表現集を見返してから「Nice」と言い直しており、必要な発話カテゴリーの英語表現が咄嗟に出てこない場合があることが分かる

3. 分析とまとめ

以上第2節では、2名の学生がそれぞれ3回通り、同じ絵本の読み聞かせをした結果を示した。それらの結果を総合すると、以下の3点にまとめられるだろう：

1. 第2.2節に見たように、英語本文の読解と発音練習を行えば、本文をある程度正確に朗読できるようにはなる。しかし、読み聞かせにおける声かけの意義を教えたり、手本の読み聞かせを見せたりしなければ、単に「本文の朗読」しか行わず、児童の発話を引き出すような読み聞かせを行うことは難しい
2. 第2.3節に見たように、手本の読み聞かせ動画を視聴するだけで、教師役学生の読み聞かせは大きく向上し、コメントや問いかけを多く取り入れるようになる。ただしその発話はほぼ全て日本語であり、英語で発話するには、読み聞かせに使用できる英語表現を学習する必要がある

3. 第24節に見たように、既存の教室英語表現集を学習することで、英語によるコメントや問いかけが増える。ただし日本語に対する英語の使用頻度は低く、必要とする発話カテゴリーの英語表現が咄嗟に思いつかない、または児童の返答にさらに反応するための英語表現が思いつかない場面があるなど、課題は残っている

これらのことから、効果的な英語絵本読み聞かせのためには、少なくとも以下の訓練が必要であることがわかる：

- ① 英語本文の読解や発話練習
- ② 本文朗読以外にも声かけをすることで、児童の注意を引きつけ、発話を促すことの重要性を教える
- ③ 日本語・英語の声かけを効果的に用いている手本の読み聞かせを選定し、鑑賞させる（あるいは教師が手本となる読み聞かせをしてみせる）
- ④ コメントや問いかけなどの声かけに使用できる教室英語表現を教える

ただし④に関しては、既存の教室英語表現集では充分でない点も同時に明らかになったと考える。というのは、既存の教室英語表現集を学習しても、日本語に対する英語の使用頻度が低い、必要とする発話カテゴリーの英語表現が咄嗟に思いつかない、児童の返答にさらに反応するための英語表現が思いつかない、といった問題が生じているからである。これらの問題の原因は、主に以下の2点と考えられる：

- ① 既存の教室英語表現集は、「場面」を中心に編纂されていて、発話カテゴリーに基づいて編纂されていない
- ② 既存の教室英語表現集は、教師が会話を「始める」表現のみを紹介していて、その発話に対する児童の返答にさらにフィードバックするための表現までは載せていない

これらについて順に補足する。①について、例えば今回用いた（第24節で紹介した）教室英語表現集は、「授業の開始」「挨拶」「前時の復習」「カードゲーム」「ALTとの事前協議」など、「場面」によって使用が想定される英語表現を集めている（ただし、「褒める」「励ます」「注意を促す」など、発話カテゴリーによる分類も一部混在している）。ただしこの中に、「絵本読み聞かせ」という場面は設けられていない。そのため、「褒めたい」「質問したい」「児童の発話を聞き返したい」などと思っても、その発話カテゴリーに当てはまる表現が咄嗟には思い出せないという現象が生まれると考えられる。もし発話カテゴリーごとに英語表現をまとめるという編纂の仕方だったら、この問題が改善すると予想される。また、1つの発話カテゴリーに対して複数の英語表現をまとめて学習できるため、今回の調査で見られた、同じ発話カテゴリーはいつも同じ表現になってしまう（例：

褒めようとするといつも Good job. になってしまう) 問題も改善できるだろう。

次に②について、実際の児童とのやりとりは、いわゆる「会話のキャッチボール」になるべきであり、教師が一方的に発話して終わり、あるいは教師の質問に児童が返答して終わり、というものではない。教師が質問し、児童が返答したら、さらに教師による Acceptance や Negation、場合によっては Doubt, Recast, Answer Confirmation などのフィードバックが必要となる。このため、実践的で効果的な英語表現集にするためには、各発話カテゴリーの発話に対し、想定される児童からの返答と、それにさらに返答するための表現を一括してまとめるべきだろう。

以上の条件を満たす、より効果的な英語表現集を提案するには、本稿では紙面が尽きてしまうため、早川 (2021 刊行予定) にて改めて提案する。本稿と合わせ、英語による読み聞かせ技術の向上につながる、効果的な訓練法確立の一助になれば幸いである。

参考文献

- Arnold, D. S., Lonigan C. J., Whitehurst G. J., Epstein J. N., 'Accelerating language development through picturebook reading: Replication and extension to videotape training format.' in *Journal of Educational Psychology*, 86, 1994. pp. 235-243
- Boom-Hoffman, J., T. M. O'Neil-Pirozzi, J. Cutting. 'Read together, talk together: The acceptability of teaching parents to use dialogic strategies via videotaped instruction' in *Psychology in the Schools*, Vol. 43(1), 2006. pp. 71-78
- Yorozuya, Ruiichi. 'How to inexperienced English teachers treat students' oral errors?' in 『北海道教育大学紀要』第1部C 教育科学編 Vol. 48 No. 2 1998年 pp. 121-129
- 大城賢編著『平成29年版 小学校 新学習指導要領ポイント総整理 外国語』東洋館 2017年
- 恵泉英語教育研究会 (KEES) 編 村岡有香、須藤桂子、飯窪実香著『外国語活動で使える! 読み聞かせ絵本&活動アイデア』(成功する小学校英語シリーズ) 明治図書 2014年
- 恵泉英語教育研究会 (KEES) 村岡有香、須藤桂子、飯窪実香「ストーリーを生かした外国語活動」
https://www.keisen.ac.jp/extension/research/peace/pdf/peace_research_2012_02.pdf (2020年 3月 23日閲覧)
- 小松幸子、西垣知佳子「インタラク션을促す英語絵本の読み聞かせとその効果」『小学校英語教育学会紀要』(8) 2007年 pp. 53-60
- 東京学芸大学 文部省委託事業「英語教育の英語力・指導力強化のための調査研究事項—平成28年度報告書—」2017年
- 外山節子監修・著、宮下いづみ著 (2010) 『音のある音声絵本ガイド』コスモピア株式会社 2010年
- 外山節子監修・著、入江智子、坂井邦晃、佐藤貴子、渋谷徹、藤澤京美著『小学校の外国語活動で成果を上げる 指導案付き 英語の絵本活用マニュアル』コスモピア株式会社 2010年
- 早川知江「英語授業での絵本の利用—語彙文法理解への絵の役割—」『名古屋芸術大学研究紀要』第38巻 2017年 pp. 233-248
- 早川知江「英語教材としての絵本と結束性—小学校「外国語活動」教材 Let's Try! の挿絵の分析—」『名古屋芸術大学研究紀要』第40巻 2019年 pp. 233-246
- 早川知江「英語絵本読み聞かせに活用できる英語表現集の開発：小学校外国語教育における読み聞かせ技

- 術の向上を目指して』『Proceedings of JASFL』Vol. 15 日本機能言語学会 2021年刊行予定
- 樋口忠彦（編）『小学校からの外国語教育』研究者出版 1997年
- 樋口忠彦（編）『これからの小学校英語教育—理論と実践—』研究者出版 2005年
- 樋口忠彦、加賀田哲也、泉恵美子、衣笠知子編著『新編 小学校英語教育法入門』研究社 2017年
- 福井県教育研究所 調査研究部 英語ユニット 吉村美幸、吉田朋世、今井信義、福島安希子「小学校における英語絵本の読み聞かせの研究—担任が無理なく取り組める手法を探る—」福井県教育研究所研究紀要122号 2017年 pp122-133
- 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）外国語活動・外国語編』2017年
- リーパー・すみ子（Sumiko Leeper）『英語を話せない子どものための英語習得プログラム ガイディング・リーディング編 アメリカの小学校では絵本で英語を教えている』径書房 2011年
- 萬谷隆一「小学校英語活動での絵本読み聞かせにおける教師の相互交渉スキルに関する事例研究」北海道教育大学紀要 教育科学編 60(1) 2009年 pp. 69-80